

# 街を行く

第82回 国立 Kunitachi

## “ウキウキ感”は街の力

今回訪れたのはJR中央線で国分寺の先、立川の手前にある文教都市「国立」です。東京都心からのアクセスは悪くありません。ひと昔こそ遠いと感じましたが、いまや周辺の新興住宅地と比べかなりアクセスが良い方と言えるようになりました。

街の雰囲気は、やはり一橋大学の存在が大きいのでしょうか、他の多摩地区らしくらぬ(?) 垢抜けた感があります。駅前にはおしゃれなカフェやブティックが立ち並び、若者たちで賑わっています。郊外の街角で多くの若者を見かけるのは、今どき珍しい風景となりました。

街の環境は良好です。駅前からまっ直ぐ伸びる「大学通り」には、自転車ラインが整備され緑がととも豊か。道を挟み拡がるように伸びた通りにも、色んなお店がひしめいています。その利用者も多くは学生さんで、彼らをみると何だか気持ちが若返りウキウキします。

この街のウキウキ感は、米国の街で言えばボストンと似ています。ニューヨークだと人をこれでもかと奮い立たせる感じなので全く違います。もっと素朴で落ち着いていて、なおかつ気持ちが弾んでくる感覚です。こんな気持ちにさせる街は、日本では相当失われてきているものと考えられます。

文教都市のこうした心地よい環境は、街のウリとなり不動産価値にプラス働きます。ですが大学がある街の多くは、そのブランドをより高く売ろうと欲張り過ぎてしまい、かえって魅力を台無しにするケースも多いようです。

“ハコ”ばかりを立派にして、本来街の主役であるはずの若者に開かれていない。経済力に劣る学生らが快適に生活するための利便性に乏しいのです。大学が“顔”の街として、人生の春を謳歌する若者のための街であっても良いのではないのでしょうか。

幸いここ国立周辺には大学が集まっており人も往来しています。

街のポイントは人通りです。人が歩かなければ何も生まれてきませんし、いかに人の往来をつくるかが街づくりの狙いであり基本です。一極集中を排して、その街としての顔を一日も早く作らない限り、日本中の郊外の街は衰退・消滅します。都心以外はみな過疎化が進んでしまうでしょう。

小生も学生、いや若者に戻った気分となりカフェでお茶をしていました。店内で仕事するのも野暮ったく感じて、しばらく人間観察を楽しみました。もしも時間帯が夕方なら、どこかのパブに立ち寄ってビールでノドを潤したい気分でもありましたが、残念ながらまだ昼下がりででしたので、仕方なく中央線に乗って神田まで帰ってきた次第です。



国立のキラーコンテンツ「一橋大学」  
文教都市は学生あつてのブランド、彼らの支持なくして高付加価値なし

### 南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。